
ポスター

長迫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポスター

【Nコード】

N4090G

【作者名】

長迫

【あらすじ】

流行らないレコード屋につとめる流行らないバンドマン・イサム。ある一枚のポスターをきっかけにイサムは現実からの逃避を決意する。

埃とカビの臭いが、懐かしい。

イサムは古びた文房具屋の前をのらりくらりと歩く。
うんと昔のことを思い出している。

小学校に通っていたころのことを思い出している。

まだ7歳やそこらの時、イサムはこの店と同じ臭いのする
商店でよく飴玉やら消しゴムやらを万引きしていた。
ちょうど、そのことを思い出していた。

あの商店の婆さんは床に顎が届きそうなほど
曲がった腰をしていて、

文句有り気な顔を突き出し、

そろばんをはじいていた。

耳が遠くて、ちょっとやそつとの声では

反応してくれない。

片方の目は義眼だった。

生き残った目も大して見えてはいなかった。

つまり、万引きにはもってこいの店だったのだ。

イサムはそれこそ小学生の子どもが

いじけたような顔をして文房具屋の前に棒立ちになった。

自分はどうしてあの商店で万引きなどしてかしたのか。

金に困っていたわけでもなければ

スリルを楽しむでもない。

なんだか突発的にやっていた。

万引きは2、3度繰り返し返したところで、

馬鹿馬鹿しくなってやめた。

イサムは罪の意識をこれっぽっちも感じなかった

かつての自分に、違和感を覚えた。

その商店と同じ臭いがする。

それで足が止まってしまった。

懐かしい臭い。

ところでイサムがこの文房具屋から離れられないのにはまだ理由があった。

この寂びれ切った店のガラスには

一枚のポスターが貼ってある。

女のトップレス写真。

彼女の写真の他には、何の宣伝の文字もなくただ小さくどこかの住所が書いてあるだけの殺風景なポスターだ。

トップレスの写真なんか、ファッション雑誌だとかCDジャケットなんかで見慣れたもんだった。

でも、イサムはこの写真に何故だか惹かれてしまった。

女はやわらかにカールした髪の毛と

ほっそりとした二の腕で胸を隠し、

無感動な表情でカメラのレンズを睨んでいる。

大して美人ではないが、そこはかと無く迫力を感じる。

シンプルなデニムを一枚履いている以外は

何も身に纏っていない。

このポスターから目を外すことができない。

イサムはポスターの右下に、見落としてしまいそうなほど小さく表記された住所をぶつぶつと呟いて

覚えようと試みる。

成功するかどうかは解らない。

イサムはアパートにたどり着くまで
ずっとその住所を繰り返して口に出していた。
朝日がようやく登り始めたころのことだ。

ひんやりとした空気が部屋から流れてくる。

しんと静まり返った部屋に

おかしいな、とイサムは思う。

いつもだったらこのぐらいの時間には

ワカゾノがカーペットの上にだらしなく転がって

テレビを観てるころなのに。

イサムは鼻からふんと息を吐いてジャケットを脱いだ。

もうそろそろジャケットだけでは寒い季節になってきた。

イサムは能天気にならぬ鼻歌を歌いながら洗面台の前に立つ。

寝不足でたるんだ自分の顔が鏡に映る。

途端に気が滅入ってしまった。

鏡の脇の棚からハサミを取り出して、刃をそっと

頬に当ててみる。

ひんやりと心地いい刺激が顔全体に伝わる。

イサムは一気に前髪を切った。

真っ直ぐに揃った前髪。

その昔、こんな髪型をしたギタリストがいた気がする。

自宅のプールで水死体となった男だ。

洗面台の床に、ダーティーブロンドの髪が

ばらばらと落ちてゆく。

鼻歌を歌いながら、トイレットペーパーで床を拭く。

さっきから歌っているこの歌の名前を、

イサムは思い出せずにいる。

果たして誰の曲だったか。

冷たい水で顔を洗い、イサムは廃人のように洗面所を出た。

一気に睡魔が襲ってきた。

今日も仕事は昼からだ。

しばらく休むことにしよう。

イサムは変わらない毎日のことを考える。

客がやってくれば店員の方が緊張してしまうほど流行らないレコード屋に勤め、

夜の11時ごろから、同じく流行らないバンドの練習に精を出す。

家に帰ってくればワカゾノの世話。

俺は一体、何をやっているんだ。

イサムは6畳とちよつとの部屋を見渡す。
散らばったCDと、脱いだままの服。

ギターの弦も、ハンバーガーの包み紙も、
煙草の吸い殻も転がったまま。

頭が痛い。

俺はこれからどうすればいいのか。

ふとイサムはワカゾノのことを考える。

この男は何故このアパートに住みついているんだ。

何故、自分が見ず知らずの男を養うような
ことになってしまったのか。

イサムはスウェットとパーカーに着替える。

最近は何の服を着てもワカゾノの香水の
匂いが染み付いている。

部屋着まで勝手に着ているのか、

気に入らない。

イサムがワカゾノと出会ったのは1年と数ヶ月前だった。

小さなライブハウスでギグを打ったあと、

メンバー達と酒を飲んでいるところに

ワカゾノがやって来たのだ。

当時ワカゾノはまだ16で、その不安定な年齢が
イサムの心に何かを突き刺した。
兄弟のいないイサムだが、弟がいればこんな気にな
るのだろうか、ふと思った。
ワカゾノは自分たちのバンドのファンだ、と言った。

「本当はあんた等みたいにバンドやりたくて、
ギター弾いてたんだ。

でも、それじゃギグを聴きに來れないから
この前売ってきたんだ」

ファンなど数えるのもおこがましい程度しかないバンドだ。
イサムはこのワカゾノの健気な言葉に心打たれ、
それこそ弟のように可愛がってやった。
もはや塗料も剥がれるほど使い込んだギターをやった。
ギグにはチケットを無料にして呼んでやった。
メンバー達との打ち上げにも招待して、
酒も煙草も贅沢すぎるほどあげた。
今思えば、まんまと騙されたのだ。
イサムの頭の中は後悔の念でいっぱいになる。

ワカゾノにとって他人は利用するほかに使い道はなく、
自分の利益のためなら他人にどんな迷惑がかかろうとも
思い通りにやってのける。

イサムが完璧に自分のわがままも聞き入れ
支配下に入ったところ、ワカゾノはこのアパートに
引っ越して來た。

この男がいれば、当分は樂をして暮らしていける。
イサムがせっせと働いている間、町に出て
女の子と遊んだり、音樂を聴きに行ったり、

服を買い込んだりと好き勝手にできる。

イサムは時折、ワカゾノの生活ぶりや豹変ぶりに腹を立てるが、そんな時はまたちよつと

可愛気のある言葉をぽんと言ってやればいい。

イサムが情に弱いことを知ってワカゾノは巧みに駆け引きをする。

こんな男を引き止めるのは楽勝だ。

しかし、どうしてこんな貧乏なバンドマンに

頼って生きているのかはワカゾノにも説明がつかない。

もっとリッチな出資者がいるに越したことはないのだが

この小さなアパートから出て行くつもりは

ワカゾノにはこれっぽっちもなかった。

「うーん」

イサムはうなり声をあげてうなだれる。

何も考えたくない。

レコードばかり見て疲れてしまった。

レコードとレコードの間にはさまる埃をとってばかり。

バンドは怠けた練習を重ねるばかり。

もうベッドに入ろう。

眩しい朝陽はカーテンによって遮られている。

3

また同じ曲を歌いながらイサムはベッドにもぞもぞと入った。
やはり曲名は出てこない。

ベッドに倒れ込もうとすると、何かがぶつかった。
ワカゾノだ。

布団をめくり上げると、不満そうに顔をしかめる。

ワカゾノをどついて端に押しやり、無理矢理ベッドに入ったイサムは
声をかける。

「ワカゾノ、寝てたのかい」

「寒い」

「珍しいじゃねえか、寝てんのなんか」

「寒いってば」

嫌味のひとつでも言ってやろうと上体を起こしたが、
会話をする気配のないワカゾノの寝顔を見下ろし、
イサムは深いため息をつく。

また見たことの無い服を着ている。

ワカゾノの浪費癖に泣きたくなくてイサムは
乱暴に頭から布団をかぶった。

その勢いにすっかり目を覚ましかワカゾノは
イサムの脇腹を拳で軽く殴って、ずるずるとベッドから降りた。

「いてえな、なにすんだよ」

脇腹をさすりながら寝転がっているイサムの顔を覗き込みワカゾノは

「お勤めご苦労さん」

と言った。

イサムはワカゾノの顔をじっくり眺めてみる。

あの日、ライブハウスで出会ったとき、

まだワカゾノはこんな憎らしい顔つきではなかったはずだ。

イサムはまたもや後悔でいっぱいになった頭を抱え込む。

人を見る目がないにも程がある。

イサムはワカゾノの頭を小突く。

ワカゾノはイサムの憤怒を他所にへらへら笑っている。

「腹減った」

イサムの脚が伸びていると知りながら

ワカゾノはわざわざ踏みつけるように布団の上に座り込んだ。

「いてえって。いてえよ、降りろ」

イサムはそう言ってはみたものの、

もうワカゾノを構ってやる気力も体力もなかった。

無反応のイサムをつまらなく思ったワカゾノは

ベッドから離れてテレビをつけた。

イサムは寝返りを打つ。

やっと眠れる。

そのうちにワカゾノもどこかに出かけるだろう。

イサムの財布から数枚の紙幣を抜き取って。

テレビからは料理番組の音が流れてくる。

女性アナウンサーの甲高い声と、

一流シェフのユーモラスな解説が聞こえる。
身体中に溜まっていた疲労が一気に押し寄せてきて
イサムの意識はいよいよ朦朧としてきた。
ところが、みるみるうちに大きくなってゆく音量に
睡眠を中断せざるを得なくなってしまった。
ワカゾノの子どもっぽいやり方にはいい加減
我慢がならない。

床に出しっ放しの雑誌を丸めてテレビの前に
ぼんやり座っているワカゾノの頭を思い切り叩くと、
イサムはテレビを消した。

「なにすんだよ」

ワカゾノは大袈裟に頭をさすってみせた。

「うるせえだろ。俺は寝るんだよ。働いて疲れてんだ」

「腹減った」

「お前も家賃の半分ぐらい払ったらどうなんだよ。
俺を頼るのは止めてくれないか
俺はイキモノ飼うほど稼いじゃないんだから」

いつになく真剣なイサムの顔をじっと見返し、
ワカゾノは一言、こう言った。

「腹減ったな」

結局、イサムはワカゾノと下らない押し問答を繰り返した末、厨房に立つ羽目になった。

もう一度テレビのスイッチを入れて冷蔵庫の中を引っ掻き回す。

テレビで放送されている料理番組に触発され、どうしても食べたいと言ってワカゾノが聞かなかったからだ。

ぶつぶつと文句を言いつつも、イサムは手際よくテレビの言う通りに調理していった。

田舎の父親が調理師免許を取得していたこともあり、幼いころより料理が得意だった。

両親にはそんな父にならない、調理師免許を取って小さな店を出すことを期待されていたが、この通りならだとバンド活動に興じている。

こんなことになるんだったら、大人しくレストランで修行するなり調理師学校に通うなりすればよかった。

相変わらず女性アナウンサーはきんきんした声でオーバーなリアクションをとっている。

トマトソースの美味しそうな匂いが鼻をつく。

眠たい目をしばしばさせて、ワカゾノを呼ぶ。

「オリーブオイル取ってくれ」

「どこにあるか解んない」

ワカゾノの貧乏揺すりにも苛々が募る。

もう既にダイニングテーブルについたワカゾノはさっきまで騒いでいた空腹が嘘かのように料理に興味を示さない。

そういう奴だ。

イサムは鼻歌を歌って丸々とした鶏肉を炒める。
いちいち振り返ってテレビの進行を確かめなければならないのは骨が折れる。

「ワカゾノー、リンゴっていつ入れてる？」

「さあね」

頬杖をつきつまらなそうにテレビの画面を眺めるワカゾノの横顔を恨めしそうに見やって、イサムはテレビとキッチンとの間を行ったり来たりして調理を続けた。
途中、カーテンを開けにベッドの方に走った。
眩しい光が差し込んでくる。
2人が住んでいるのに、一人暮らしのころよりも忙しくなっているのはどういふことだ。

「さっきから古い歌うたってるね、イサム」

自分で振りかけたスパイスのせいでくしゃみが出る。
パーカーの袖で鼻を拭いながら、イサムはワカゾノの言葉に飛びついていた。

「なんて曲だっけ、これ？」

「verveのだよ。verveのbittersweet symphony」

そうだ。

たまにはワカゾノも役に立つ。
何時間も思い出せなかった曲名が解っただけで、なんだか気分がす

っとした。

些細なことなのに、不思議だなとイサムは思った。

「いい歌だよね。サイコー」

その言葉とは裏腹にだるそうな声を出すワカゾノの前にイサムは料理を出してやる。

テレビの画面は一変し、天気予報を放送している。

ワカゾノは横目で皿を一瞥し、すぐに天気予報に夢中になった。

「食えよ。お前が作れって言ったんだろ」

無言でフォークを手にとったワカゾノは2、3回皿の上の料理をかき回すと、食べるでもなくぼんやりとしたままになった。

もともと食欲など無いイサムが煙草に火を点けると、ワカゾノも欲しがった。

煙草の箱とライターをテーブルの上に滑らせる。

天気予報はこれから急に寒くなると伝えている。

煙草をくわえたワカゾノは大きな音を立ててフォークを皿の上に落とした。

「馬鹿。食え」

イサムが煙を顔に吹きかけるとあからさまに嫌な顔をして見せたワカゾノは、すぐにふんと鼻で笑ってイサムの神経を逆なでした。

「つまり重要なのはさ」

ぐっと身を乗り出してイサムの顔を覗き込む。

そしてさっきの仕返しと言わんばかりにワカゾノはイサムの顔面を

めがけて煙草の煙を吹いた。

「料理そのものじゃなくて、あんたが俺にちゃんと料理を作るかどうかってことだよ」

イサムは眠い目をこすり、鼻歌をうたう。

綺麗な青空が窓の外に我が物顔で広がっている。

再びフォークを手にとって料理を食べようとするワカゾノと、ベッドの向こうの窓を交互に見比べる。

ワカゾノの皿に吸いかけの煙草を押し付けると、じゅっと乾いた音が響いた。

あっけにとられた顔で固まっているワカゾノと言葉を交わすこともなく、イサムはベッドに向かった。

携帯電話の間抜けたアラーム音が耳元でうるさく鳴って、イサムは身体をこわばらせる。

たった3時間しか寝られなかった。

むっくりと起き上がり、両手の平でごしごしと顔面をこすった。

首をひねって部屋を見渡すと、ワカゾノの姿はなかった。

いつの間に出かけたんだろう。

ダイニングテーブルの上には、手つかずの料理が乗ったままになっている。

自分が押し付けた煙草が淋しげに皿に乗っている。

大きな伸びをしてから食器を洗う。

何時間か前までは、けっこう美味そうな代物だったのになとイサムは考える。

のろのろと着替える。

やはりどの服を着てもワカゾノの香水の匂いがする。

不自然な折り目がついた雑誌が床に転がっている。

今朝丸めてワカゾノを叩いたものだ。

あぐらをかいて雑誌を開き、イサムは何の記事を読むでもなくしばらくとページをめくり続けた。

ワカゾノのことを考えたり、仕事のことを考えたり、バンドのことを考えたりした。

冷たい空気が床から伝わってくる。

ベッドから毛布を引きずり降ろして頭からかぶった。

暖房はできるだけつけたくない。

ワカゾノがイサムのいない時分に好き放題使うため、光熱費が馬鹿にならないのだ。

雑誌には、豊かそうで自身に満ちあふれた男たちがたくさん出てい

た。

そのガールフレンドたちも同じように余裕の表情で掲載されている。いい気なもんだ。

イサムは化粧品のコムのページで手を止めた。

トップレスの女が花畑にいる写真だった。

鮮やかな色彩の花々に囲まれた、真っ白な肌の女。

口紅のコムなのか、唇だけが妙に艶めている。

髪の毛と花で胸を隠している意外は、シルクの長いスカートを纏っているだけだ。

綺麗な写真だった。

イサムは夜明け前に見た一枚のポスターを思い出す。

デニムをはいた女のトップレス写真。

急に思い立って、かぶっていた毛布をはねのける。

カーペットの上に散乱したガラクタの中から、イサムはかろうじて一本のボールペンを見つけ出した。

家路についているとき繰り返し呟いていた住所を、もう一度口に出してみる。

意外にもしっかりとしていた自分の記憶力にイサムは喜々として、住所が書きなぐられたページを破ってポケットに入れた。

あのポスターは何なのか。

ただこの住所だけが書かれた一枚のポスター。

この住所には何が隠されているんだろう。

イサムはちょっとした謎解きをしている気分になって、それまでの鬱々とした空気がどこかに消えてしまったような気にさえた。

あの女は何者で、あのポスターの目的は何で、あの住所は何を意味するのか。

イサムは寒々とした町並みを歩く。
売れないレコード屋に行くためだ。

しかし心の奥底が高揚している。

この町のどこかにあのポスターの女がいるかもしれない。
レコード屋にふらりと立ち寄ることがあるかもしれない。
バンドのギグを聴きに来るかもしれない。

何かの間違いでボロアパートを訪ねてくるかもしれない。
道ですれ違ったり、スーパーではち合わせたり。

イサムの想像は尽きなかった。

なにより、あのポスターに記された住所には何かあるに違いない。

イサムはポスターの女の恋をしたわけではなかった。

そんな浅はかな問題ではない。

運命的なつながりとはこんなことを呼ぶのだろう。

イサムはそう信じて疑わなかった。

あの女は、きっと自分の生活を180度変えてくれるはずだ。
モノクロの画面がカラーに転じるように。

相変わらずレコード屋は客が少なかったし、珍しいことは何一つ起こらなかった。

しかしイサムのはあのポスターでいっぱい、それが味気ないなどとは決して思わなかった。

もはや現実には興味がない。

イサムは現実逃避をしている自分を嘲笑する。

謎のポスターの正体を躍起になって探ろうとするみじめな男。

しかしあのポスターは本当に非現実と呼べるのだろうか。

綿埃をつけたレコードを飽かずに拭いてまわりながらイサムは考える。

あのポスターが現実とほど遠いなんて、まだ決まっていない。

現実在即したものかもしれない。

つまり、あのポスターを突き詰めることには何らかの意味があるかもしれないということだ。

取るに足りないと言ふ人もいるかもしれない。

しかしイサムは藁をも掴む思いで、ポスターにのめり込むことにした。

今や得るものも失うものもない。

何を傷つけようが、逆に手に入れようが、イサムは構わなかった。

「ブライアン・ジョーンズみたい」

イサムの髪の毛の変化に一番最初に飛びついたのはミツだった。

狭いスタジオの中に、少しハスキーなミツの声はよく通った。

イサムはミツの手を邪険に振り払う。

ミツはあはたと下品に声をあげて笑った。

こんな小さなスタジオに5人もの人間がぎゅうぎゅう詰めになっている。

空気も悪いし、身動きひとつとるのも一苦労だ。

ばらばらと散らばったシールドを踏まないように神経を尖らせる。

難聴を促すクラッシュシンバルとベースアンプに挟まれて立つ。

裸電球が頭に触れる。

ミツだけはひとり優雅にギターアンプに腰掛けている。

「お前いちいち練習見にくるなよ。狭くて迷惑なんだよ」

イサムはミツが苦手だ。

押しの強い性格で、なんだかんだと口うるさいミツは、バンドのこのみならずイサムの私生活にまで干渉してこようとする。

イサムはただでさえワカゾノで手一杯なのに、ミツをも入れ得る視野はもはや持っていなかった。

イサムはミツのいいところなどひとつも挙げられない。

バンドの女性ファンには一人残らず皮肉を言って回るし、自分の気に入ったアレンジで演奏しないとステージにビールをふりかける始末だ。

散々酔っぱらったあと、夜中の2時すぎにイサムの家に訪ねて来たこともある。

バンドメンバーへの借金など朝飯前だし、なにより世界中の男は皆、自分に恋していると思っている。

ミツとはそんな女なのだ。

「タッチが浮気したら困るじゃない」

イサムのコーラを勝手に飲み干したミツは、空のペットボトルをスタジオの床にぽんと投げた。

中身が少しこぼれてシールドにかかった。

スタジオの管理人に見つかりでもしたら厄介なことになる。

ミツはそんなのお構い無しというように、口を半開きにしてドラムセットを眺めている。

イサムはミツのこの顔が嫌いだ。

ミツは鼻炎アレルギーを持っているせいで、どんなときでも鼻が少し詰まっている。

だから口で呼吸しないと、苦しくて仕方がない。

ところがその口を半開きにしたミツの顔つきは実に呆けていて、イサムの不快感をふつふつと誘った。

バンドのギタリストであるタッチとイサムは中学生のときからの友人だ。

休みの日は二人で音楽を聴いたり映画を観に行ったりして過ごすのが常だった。

タッチもイサムも高校を卒業すると同時に地元を捨てて首都圏でバンド活動することだけを夢みて、子どもながらに必死だった。

しかし現実には、地元からはほど近く首都圏からはほど遠い、中途半端な町での八方塞がりの生活しか現れなかった。

同じ挫折を味わった者同士、腐れ縁を歓迎する。

でもイサムにはタッチが自分と同じ種類の者とは思えない。

タッチはイサムよりもずっとハンサムで頭もよく、人懐っこい。

イサムはこの腐敗した生活へと伸びる一本道しか持ち合わせていなかったが、タッチには何本も道があったはずだ、とイサムは思う。

タッチは迷うことができた。

わざわざこの道を選んだのだ。

タッチは自らの意志で腐敗した生活を選び抜いた。

だからタッチには後悔することもできる。

周りの世界を見ることもできない、高い塀に囲まれたような道を歩んでいるイサムには後悔するさえ未知のものだ。

イサムはタッチがこんあ自分に同情しているのではないかと疑った経験もあった。

腐れ縁を馬鹿のひとつ覚えみたいに信仰して、それでこんな暮らしを選んだのではないだろうか、と。

でも馬鹿らしくてそんな考えはすぐに忘れた。

ただ言えるのはタッチはイサムよりも遥かにまともな人間だということだった。

「聞き捨てならないなあ、みっちゃん。俺は神に誓って浮気なんてしないね」

タッチのおっとりとした声がマイクを通してスタジオの中を跳ね返る。

ミツがスタジオに出入りするには理由がある。

タッチのガールフレンドなのだ。

イサムは何故タッチがミツを選んだのか微塵も理解できなかった。

この生活といい、友人といい、ミツというガールフレンドといい、タッチは何かと選択を誤る不幸な男だともイサムは思う。

言うまでもなく、温和な性格のタッチはミツのやりたい放題を全て容認するため、完璧に尻に敷かれている。

イサムは気の毒で見えていられないと思う一方で、自分とワカゾノとの関係も似たようなものかなと思ってしまった。

スタジオの窓から外を見ると、もう街灯もちらほらとしか点いていない。

イサムの喉も涸れはじめ、タッチも手首が痛いと言い始めた。

世は寝静まっている。

「終わろうか」

タツチの一声でイサム等はスタジオを後にした。

また身の入らない無駄な時間を過ごしてしまったと、イサムは大あくびをしながら考えた。

スタジオが入っているビルの前で煙草を吹かす。

ワカゾノが頭をよぎる。

あいつはもう帰っているだろうか。

これからアルバイトだというタツチを駅まで見送り、酒を飲んでから帰るというドラムのトミーとベースのツヅキバシと別れた。

そしてイサムはまたあくびをする。

いつもなら次の日の2時を回るまで練習に励むところだが、タツチのアルバイトの加減で終電までの練習となった。

その時間帯のズレのせいでイサムは為す術もなく立ちすくんでいた。普段であれば、練習の後、1時間近くかけてアパートまで歩くところだ。

真っ暗な町並みが徐々に明るみを増すのを見るのが好きだからだ。のんびり歩いて疲れきり、次の日までそれを引きずったとしてもイサムには止められなかった。

イサムの足が進まない。

今はまだ12時を差したばかりで、アパートにたどり着くまで太陽はどう間違っても昇らない。それが原因だ。

イサムは例のポスターを頭に描く。

女の顔を思い浮かべる。

もう一度あくびをする。

明日、あのポスターに書かれた住所のもとに行ってみようとイサムは思う。

退屈な現実から逃げる第一歩だ。

つまらなそうに煙草を吸い続けるイサムはふと後ろを振り返る。

腕を引っ張られたからだ。

ワカゾノかと言いかけたが、そこに立っていたのはミツだった。

朝、ワカゾノと下らない喧嘩をしたことがまだイサムの胸につかえていた。

あれほどの喧嘩は日常茶飯事ではあったが、何故かイサムは釈然としなかった。

ワカゾノを憎らしく思うのと、罪悪感とが混在している。

「なんだミツか」

「ヘビースモーカー」

にやにや笑うミツの顔が街灯の下で蒼く浮かんでいる。

わざとらしいつけまつ毛も真っ黒なアイラインも凝りに凝った爪もイサムは好きになれなかった。

「タッチならバイトに行ったよ」

イサムは眠い目をこすってミツに話しかけた。

ミツは鼻をすすりながら下を向いた。

伏し目のミツなんて初めて見たかもしれない。

イサムは珍しいものを目の当たりにして、ミツの顔から意識を逸らすことができなくなる。

薄っぺらいワンピースの上にカーディガンを羽織っているだけのミツは今にも凍えそうで、弱々しくイサムの目に映った。

「知ってる」

もう生き物なんて残らずいなくなってしまったのではないかと疑いたくなるほど静かな町に、ミツの鼻をすする音が不自然に響いた。

イサムはジャケットのポケットに両手を突っ込んでミツの次の言葉を待った。

でもミツはそれきり口を聞かなかった。

目の前の道路を一台の車が走り去る。

「始発まで待つのか？」

イサムが尋ねるとミツは急に頭を挙げ、意味有り気に笑った。
花柄のワンピースが風に揺られて舞っている。

イサムはミツがよく解らなくなってしまった。

さっきまで、見ようによれば儂げで繊細な女の子に見えたのに、それがただのお面のようにも思える。

ミツにつられてイサムも鼻をすする。

「あたしね、今月、誕生日なんだ」

「あっそ」

「なんかプレゼントしてよ。一杯おごって」

イサムはうなだれた。

誕生日プレゼントをねだる芝居だったのか。

そうだとっても今まで見たことのないミツが垣間みれたことはイサムにとって貴重な体験だった。

勝手な先入観のもとに人の善し悪しを判断したら失敗するという教訓は、ワカゾノが十分イサムに示してくれたからだ。

しかしミツの誕生日を祝う気など毛頭も無いイサムはあっさりと断って、アパートの方へ歩き始めた。

ミツはそれでも諦めず、イサムの背を追った。

慎重に言葉を選んでイサムの気を引こうと必死なミツは、お面の下のミツだった。

刺すような風が吹く。

イサムは肩をぎゅっとすくめて足早に家路を急いだ。

「じゃあさ、ジュークボックスがある店で飲もうよ。1曲プレゼントして。そしたら満足して、あたし帰る」

イサムは迷った挙げ句、しぶしぶミツの提案を受け入れた。
ジュークボックスがある店で飲むのは久しぶりだった。

タッチと何度か行ったことがあったが、イサムはあまり好きになれなかった。

誰かがジュークボックスを触らない限り、その店には音楽が流れない。

嫌でも周囲の人間と言葉を交わさなければならぬ。

重苦しい雰囲気押しつぶされそうになる。

想像しただけで気が滅入りそうだが、イサムは承諾した。

イサムがミツの願いを聞いたのには胸にある期待を抱いていたからだ。

毎日のイサムの行動範囲はあまりに狭すぎる。

これではポスターに核心を追求することができないまま終わってしまう。

子どもの遊びにも劣る程度の逃避術。

でもイサムは構わない。

手に入れるものも失うものもない。

イサムがミツに克蘭ベリーベースのカクテルを持って行ってやると、「このワンピースにぴったりじゃない？」とうるさくはしゃいだ。

小さな店の中は空気がこもっていて、イサムはまるでさっきまで5人が入っていたスタジオのようだなと思った。

カクテルを作ってくれた女の子が一瞬ポスターの女に見えた。

しかしすぐに別人だと思った。

店員の女の子は目が垂れていて人がよさそうだ。

ポスターからこちらを睨む女の目は鋭いものだった。

ポスターでいっぱいの頭を搔いて、イサムはビールを流し込む。

店には2人の中年男と1組のカップルしかいなかった。中年の男たちは時折下品な笑い声を上げて話している。カップルはいかにもマリリンマンソンが好きそうな化粧と服装で楽しそうに酒を飲んでいる。

「イサム、ほらジュークボックス！1曲プレゼントしてっば」

「うん、何がいい？」

イサムは隣の丸テーブルを拭きに來た店の女の子をぼんやり眺めてミツに答えた。

スリムなデニムはやはりイサムにポスターの女を連想させた。でもこの店の女の子は黒いストレートの髪の毛を持っているし、どこか媚びるような顔をしている。

イサムは意味の成さない虚無感に駆られた。

「イサムが決めて」

自分の爪を熱心に見ながらミツが無遠慮に言う。

イサムは立ち上がってジュークボックスに向かった。

立ち上がった拍子に木の椅子が少し大きな音をたて、テーブルを拭いていた女の子はぱっとイサムを見た。

すかさずミツが女の子を睨んだ。

そんなやりとりを何とも思わない自分をイサムは変だと思う。

ポスターのことを考えているからだ。

まるで強迫観念のようにイサムの頭にこびり付いている。

ジュークボックスの前でイサムは悩んだ。

ミツの音楽の好みを知らない。

アイドルの曲なんかをかければ無難なのだろうが、いまひとつ芸が

なく思えて仕方なかった。

曲目を調べる。

イサムはあくびをして店にかかっている振り子時計を見た。

ワカゾノは帰っているだろうか。

ワカゾノに寛容になっている自分がいる。

イサムはジャケットのポケットに手を入れて一瞬、考え込んだ。

きつと、なにもかもポスターに夢中だからだ。

イサムは100円玉を入れてボタンを押した。

イサムが丸テーブルに戻ると、ミツがぱっと嬉しそうな顔をした。

大きな音を出さないように椅子を引いて腰掛ける。

ミツの目は活動的に光っている。

この女の原動力は一体どこにあるんだ。

イサムはビールを飲む手をとめる。

中年の男の大きな笑い声が響く。

ジュークボックスから乾いたギターの音が流れる。

マリリンマンソンのファンのカップルも、一瞬顔を見合わせてスピ

ーカーを見た。

二人揃って同じ仕草だ。

大したものだとイサムは感心した。

「あ、この曲」

「知ってる？」

「知ってる。大好きなんだ、この曲。wonderwall。夕方によく聴いたな。なんか淋しくてさ、そう思わない？」

煙草に火を点けてイサムはうん、と言った。

「ね、イサム。なんでこの曲プレゼントしてくれたの？なんか意味あるの？」

マリリンマンソンのファンと思しきカップルが仲良く手を繋いで店を出るのを目で追いながら、ミツはそうイサムに尋ねた。克蘭ベリーカクテルはもう無くなりかけている。

ビール瓶の下に溜まった雫をなぞるイサムの長い指を見てミツは複雑な気分になる。

手に入りそうで手に入らない。

手に入っても、きつと拳をひらくときれいさっぱり中身は無くなっているはずだ。

ミツは思わず皮肉っぽく唇を曲げて笑った。

雪みたいだ。

ミツの地元は雪の多い地域だった。

毎年冬がやってくれば文字通り山のように雪が積もった。

幼い頃はよく雪の上に寝転がって遊んだものだった。

上下のウィンドブレーカーも、厚手の手袋も、毛糸の帽子も濡れて気持ち悪くなるまで遊んだ。

雪の上に仰向けになる。

雲ひとつない太陽が照りつける中、痛いほどの寒気が雪を溶かすまといと冬を謳歌する。

ふとミツは雪の中に、はっきりと結晶の形を見たことがあった。

絵本や図鑑で見たのとなにひとつ違う雪の結晶を見た。

真っ白な雪は、この小さくて華奢な結晶が集まったものなのだ。

ミツは雪の結晶に神秘を感じた。

こんなに小さくて綺麗な結晶がやがては疎まれる対象になるなんて。その日以来、ミツは雪が降れば厚ぼったい手袋を瞬時に外して結晶

を掌に乗せようと意地になっていた。

ところが雪は掌に乗った瞬間、ミツの体温で瞬時に溶けてなくなる。残るのは、結晶とはほど遠い醜い水滴だけ。

雪の結晶は掌に乗せることができない。

結晶の形のまま手に入れることは、ミツにはできない。

ミツはイサムといると、どうしてもそんな雪の結晶のことを思い出してしまうのだ。

結晶は掌に乗せられない。

イサムはボーイフレンドにできない。

掌に乗せられないから好きなんだ。

ミツは少し大人になったとき、そう思った。

イサムはボーイフレンドじゃないから好きなんだ。

雪の結晶は掌の乗ったその時にはもう、化けの皮が剥がれていた。

きつとイサムもそうなんだ。

ミツは高まるフラストレーションに言い聞かせる。

イサムだってボーイフレンドになったら嫌な面しか見せなくなる。

雪の結晶とイサム。

わかっていてもミツが諦められないものたち。

「別に。ヒット曲だからミツも知ってると思って」

ミツの想いに気づく由も無いイサムは素っ気なく答えた。

イサムは切ったばかりの前髪を触る。

返事をしないミツを不審に思いながらも、イサムは2本目のビールを買いに行った。

さっきミツにカクテルを作った女の子はもう仕事を終えて帰ったようだった。

太った店主が瓶の蓋を開けてぶっきらぼうにビールを差し出す。

イサムが小銭を出すのに手間取っている間、店主はwonderw

a11を口ずさんでいた。
振り子時計は1時半を指さんとしている。

「そろそろ帰る」

イサムが丸テーブルに戻るとミツが言った。

「始発はまだまだだよ」

「知ってる」

イサムはミツを怪訝に思う。

また、さっきの街灯の下にいたときのようなミツが見え隠れし始めたからだ。

お面をかぶったミツ。

何か言いたげで、でも絶対に口を割ろうとしない。

困ったような淋しそうな顔をしてミツは黙っている。

イサムは何故だか急にタッチに謝りたい気分になった。

ちよつとそんな考えが頭によぎるともう歯止めが効かない。

今すぐにでもこの腐ったような店を出て、タッチのもとへ走っていきたくなった。

何が原因なのか明確ではないけれど、どうしてもタッチに謝りたかった。

自分はどうかしていたな、とイサムは思う。

いつもの調子ならばミツの誘いなんか鼻で笑って吹き飛ばしていたものを、今日という日は何をやっているんだ、と思う。

頭が痛くなってくる。

一旦、タッチを思うとミツを引き止めるという手はイサムにはなかった。

「気をつけろよ。暗いから」

帰宅を促されたミツは、やはり淋しそうに笑って席を立った。二人の中年が、ちらりとミツを見た。

イサムはもどかしい気分を抹消するために煙草に火を点けた。しかしそれは何の効果ももたらさなかった。

店の扉の前でミツがイサムを呼んだ。

振り返ったイサムの顔を見て細い腕を振る。

「wonder wall、どうもありがとう」

イサムはそれから間もなくビールを飲み干し、店を出た。頭痛を抱えての家路は辛かった。

ジャケットのポケットから手を出すことは敵わなかった。

文房具店の前で例のポスターをもう一度見るまでは、イサムの気分は沈んだままだった。

何かが違う。

何かがずれている。

答えを覚えておくれ、とポスターに話しかける。

口笛を吹く。

wonder wallだ。

アパートの扉を開けると、煙草の煙が充満した重い空気が顔にかか

った。

「ワカゾノ。帰ってたのか」

「お帰り」

頭痛の一原因であるワカゾノの姿を認めると、頭痛が軽減した。

抽象的なのに嫌な気分になる夢をみて、イサムは起きた。
背中に鋭い痛みを感じる。

次第に意識がはつきりしてきて、なんとなく状況をつかむことができた。

昨夜シャワーを浴びて部屋に戻ったら、ワカゾノが贅沢にベッドを
独り占めしていた。

だからイサムは仕方なくカーペットの上で毛布にくるまって寝た。
この前のようにワカゾノを押しつけて喧嘩するのは嫌だった。

正確に言えば、イサムが嫌なのは喧嘩それ自体ではなく、あの後味
の悪さだ。

コートやTシャツを枕にしたがひどく寝違えてしまった。
なにより毛布一枚では寒かった。

イサムは毛布を身体にかけてコーヒーをいれにいった。

寒い日は水が沸くのにも大変な時間がかかるように思える。

床に落ちている腕時計を見ると昼の11時だった。

急にイサムはミツの顔を思い出した。

そのすぐ後に、タッチの顔が頭に浮かんだ。

変な気分だ。

イサムは頭を横に振ってうつむいた。

なんて変な気分なんだ。

ケトルは一向に湯気を吐き出さない。

イサムは仕方なくカーテンを開けに行った。

アウトドアは嫌いだが、日光は好きだ。

この部屋のカーテンはバーバリーのコートの裏地を縫い合わせて作
ったものだ。

バンドのファンの女の子がある日作ってくれた。

赤いステッチが可愛いが、ところどころに染みがある。

今では何とも思わなくなったが、もらった当時は肝が抜けた。染みがついたものを人に贈るなんてイサムには考えられなかった。

「そろそろ起きな。昼だから」

イサムはベッドの上に乗っていたキャラクターの小さな縫いぐるみを心地よさそうに眠るワカゾノまめがけてぼんと投げた。

これもファンの子がくれたものだ。

思えば自分にも結構ファンがいるのかなとイサムは考える。

最大にして最低の贈りものは、ワカゾノによるワカゾノに違いない、とも思った。

寝ぼけた様子でワカゾノは「うーん」と伸びをした。

ケトルはやつと湯気を出しはじめた。

イサムも寒さを忘れかけたころだ。

「コーヒーはいるよ」

「ちょうどそんな頃かと思ってたよ」

ベッドから降りたワカゾノはそう言ってなんの躊躇いもなくイサムの大きなパーカーを羽織った。

そしてイサムの口ずさむ歌を聴いて笑いながらこう言った。

「ふん、wonder wall？」

「イサム昨夜遅かったね」

まだ眠そうなとろんとした目をしながらワカゾノはコーヒーを飲む。そしてパーカーの袖口を歯で噛んだ。

ワカゾノの癖なのだ。

幼いころから何故だか服の袖口を噛んでいた。

気づけば癖が出ていたから、長袖の服の袖はどれをとってもボロボロだった。

その癖は未だ治らず、イサムの服もやがて袖がボロボロになりつつあった。

イサムは何度かやめるように言ったが小さな子どもを躰ける父親のように思えて気恥ずかしくなって、放っておくことに決めた。

「飲んでたんだ」

「誰と？ タッチ？」

イサムは答えを躊躇した。

ワカゾノにタッチという名を出されたこともあって言いづらかった。ミツの花柄のワンピースを思い出した。

お面をかぶったミツ。

ミツにネガティブな感情を抱かなかったのは昨日が初めてだった。タッチの選択が間違っているとはあながち言い切れないと、そう思ってしまった。

イサムはワカゾノの視線を痛いほど浴びて「タッチじゃない」と答えた。

イサムの戸惑いを敏感に感じ取ったワカゾノは意地悪い声で適当な相づちを打った。

「ミツだよ。ミツと飲んだ」

イサムは前髪を触りながらワカゾノに言った。
ワカゾノの、噛んで糸がほつれた袖を見る目が驚いたように見開かれる。

イサムがミツを苦手に行っているのはワカゾノも百も承知だった。
ワカゾノも同じようにミツは嫌いだった。

ミツは今のワカゾノの位置をいつだって虎視眈々と狙っているのだから。

ワカゾノにとっての優しい貯金箱は、ミツにとっては素敵な恋人になり得るのだ。

「手遅れ？」

「いや、どうしてもジュークボックスがある店に行きたいって言うんだよ」

ワカゾノはコーヒークップを無言でイサムに差し出す。

イサムはコーヒーを温めにキッチンに立つ。

勢いのないイサムの背中を見つめて、ワカゾノはまた意地悪な気分になる。

意地悪な気分になって、wonderwallを歌う。

イサムはコーヒーから湯気が立つのをじっと待つ。

イサムの頭の中には色んなものが渦巻いている。

最後に浮かんだのはポスターの女。

あの真っ直ぐな視線に取り憑かれている。

この変な気分はなんなんだ。

教えておくれ。

ミツに関して散々からかわれたイサムは状況を打破するためにワカゾノを誘ってでかけることにした。

貴重な休みの日をワカゾノと過ごしてしまうのは勿体無い気もしたが、それには訳があった。

イサムが繰り返し口に出して覚えていたポスターの住所はワカゾノの実家の近くなのだ。

まったく土地勘のないイサムが一人で出てゆくよりは、情報を持っているであろうワカゾノがいたほうがスムーズに進むと思った。

なにもないかもしれない。

なにも起こらないかもしれない。

それでもいい。

失うものはないし、何が増えても構わない。

イサムがポケットからメモを取り出してワカゾノに住所を読み上げると

「それならすぐに解る」

と答えた。

ちようにいいからワカゾノを実家に置いてこようかとイサムは考える。

軽い冗談のつもりだったが、ワカゾノの新しいスーツを目にしたときその考えは信憑性を増した。

仕立てのよさそうなストライプのスーツ。

先月の給料がちっとも見当たらないと思ったたら、スーツに消えていたのか。

イサムはジョン・ライドンよろしく髪をつんつんに逆立てたワカゾ

ノを溜息まじりに見やる。
そのスーツの袖はまだほつれていない。

イサムの目指す町は歩いて40分ほどの場所にあった。
ワカゾノはタクシーを止めようとしたりバス停で立ち止まったりしたが、イサムは無視した。

「曇り出したじゃねえか。雨嫌いなんだよ」

ワカゾノの言い分はもつともだったが、それでもイサムは断った。
どんよりと曇った空の下を歩きたかった。

ワカゾノと冗談を言い合いながら歩くのは実に久しぶりだった。
イサムが日中寝ていることもあり、生活時間帯がまるで噛み合なかったのも原因だ。

この男はいつまで家に居候するつもりなのだろうとイサムは不安になる。

バンドのために新しい機材を買おうとタッチと約束したのに、イサムの貯金は一定額を保つどころか最近ではワカゾノのお陰ですっかり底をついている。

さあ、答えを教えておくれ。

イサムはポスターに問いかける。

平日の町並みは死んだようだった。

不幸せそうなサラリーマン数人とすれ違う他は誰も歩いていない。
日増しに低くなってゆく気温に厚い層から成る灰色の雲は憂鬱を誘うばかりで、ワカゾノはもはやうんざりしていた。

昼間からライトを光らせて走る車を不審な目つきで眺める。

太陽のいない町にその光が虚しく目立った。

急に死んだ祖母のことがイサムの頭をよぎった。

彼女は背こそやや高めだったが、スーパーモデルのように痩せていた。

いくら歳をとってもブランドものの服を着ていたし、無茶なヒールのパンプスを好んだ。

決して弱音を吐かない、気丈な女性だった。

イサムは世間一般の「おばあちゃん」のイメージから遠くかけ離れた自分の祖母と親しくなれなかった。

中産階級の家生まれた自分と祖母の生活スタイルの差の大きさに辟易したものだった。

週末に祖母の家を訪ねると決まって有名パティシエが作ったという名目の菓子を出された。

キッチンはモデルルームにも劣らないほどのクオリティーだし、上品な薔薇の香りの香水を欠かさない。

凜と前を見据えて生きていた。

住む世界が違うのだ、とイサムは感じた。

イサムの祖母は癌で死んだが、抗癌剤も鎮痛剤も使わなかった。

主治医は奇怪なものを扱うかのようにイサムの祖母と接した。

その病院側の態度が気に入らなかったイサムは、それから毎日見舞いに行った。

病院でも祖母はしっかり化粧をしたし、自分の気に入った部屋着しか着なかった。

身体の衰弱はイサムにも見て取れた。

しかし祖母の顔つきは至って平静で崩れることがない。

イサムの心に改めて祖母の根性が刻み込まれた。

「人の前で涙を流すのは真の女じゃないのよ」

祖母は見舞いに來たイサムにある日そう言ったことがある。

夫が事故死しても泣かなかった女だ。

イサムはなるほど、と思った。

同時に人の目を盗んで泣いている祖母の姿を思い描いた。

イサムが「俺を人と思わなければいい」と言うのと「孫なんて尚更でしようが」と笑われた。

結局、祖母はモルヒネで死んだ。

最初で最後の鎮痛剤はそれまで薬を服用しなかった祖母の身体に効きすぎるほど効き、あつという間い死んでいった。

今日の天気のようにどんよりとした曇り空の日に祖母は死んだ。

イサムが12歳のときだった。

イサムはしばらくそんな祖母のことを思い出していたため、ワカゾノの話は片方の耳からもう一方の耳へとすり抜けていっていた。

ワカゾノが被っていたシルクハットをふざけてイサムの頭に乱暴に乗せたところで、イサムはようやく我にかえった。

「いてえな」

「喉かわいた」

イサムはしぶしぶワカゾノにコーヒーを買ってやった。

一人で歩いていれば目的の町にさしかかっている頃なのに、まだ半分にも至っていない。

「ところでなんであんたがこの町に用事なんかあんの？」

イサムは本当のところをワカゾノに喋ってしまうと小馬鹿にされそうだと気が進まず、仕事の関係だと適当に答えた。

ワカゾノはおかしな顔をしてイサムを横目で見たが何も言わなかった。

「おいワカゾノ。コーヒー、一口くれ」

「いやだ」

イサムはジャージのジップアップを一番上まで閉めた。歩いても汗ひとつかかなかった。

ワカゾノの実家のある町に近づくにつれて、町はより淋しくなっていく。

土地が安いのか、大きな家が立ち並ぶ。

そんな家々の窓をイサムはちらりと覗く。

ある家では中年の女がソファに寝転んでテレビを眺めている。

その目はテレビの向こう側を見ているように遠くを見据えているようだった。

とある家からはピアノを弾く音が聞こえてくる。

間違えてばかりだが、チャイコフスキーの曲だ。

暗い曇りの似合う町だ、とイサムは思った。

大きな犬とのんびり散歩する年取った男が二人の前を横切った。

犬も男もとてもゆっくり歩くのでイサムとワカゾノは立ち止まって、犬と男が過ぎ去るのを見送らなければならなかった。

スローな町だった。

「言っておくけどイサムがご所望の場所には、なにもないよ」

「薄々感じてたところだ」

イサムはシルクハットを被りなおす。

空を見上げると鳩が群れを成して飛んでいるところだった。

「マジで何もないんだぜ、その住所」

ワカゾノは念を押し、飲み終わったコーヒー容器を道にぽんと捨てた。

容器は近くの家の花壇に見事に入ったが、その家の花壇は荒れていてワカゾノの捨てたゴミはなんとも言えなくマッチした。

植木鉢は欠けているし、植物も枯れている。

履き古したサンダルが片方だけ転がっている。

竹ぼうきと緑色のプラスチックのじょうろが花の上に倒れこんでいる。

ワカゾノを産んだ町。

「何もないって言ったって、その住所が存在しないわけじゃないだろう」

ワカゾノは皮肉っぽく笑って答えた。

「その方がいっそいい」

イサムは住宅地を抜けたところから辺りを落ち着かなく見回しはじめた。

イサムの頭を駆け巡るあのポスターは古い文房具店にしか貼られておらず、それ以外の場所で確認したことがなかったのだ。

しかしここはあのポスターの下部に書かれていた住所にほど近い場所だ。

どこかに貼られていても不思議じゃない、とイサムは期待する。

そこでイサムはひょっとして優先順位を間違えたかもしれないな、と思った。

あの文房具店の人間に一体どういう経路で入手したポスターなのかを訊けばよかった、と。

イサムは混乱していた。

一過性の興味に真剣になるなんて本当に馬鹿みたいだ。

それでもあのポスターには何かあると思えるのだ。

何かある。

「あ、ワカゾノくん？」

イサムは女の声に驚いた。

前から小走りにやってきた女の子はワカゾノに手を振っている。

この子はポスターの女じゃない。

明るい茶色の髪をボブにしている。

目が小さくて主張の少なそうな口元。

大きなヒッコリーのオールインワンを着てにこにこしている。

頬はそれがチークと誰もがわかるように桃色に染まっている。

「おう」

ワカゾノは半ば彼女を無視して歩き続けている。

「帰ってたの？」

「いや」

言葉少ななワカゾノはかなり不機嫌そうだった。

イサムは珍しい態度のワカゾノに驚きを隠せなかったが好奇心から二人がもっと会話をすることを望んだ。

イサムの願いをよそに女の子はすぐに反対方向に歩いていった。話を続けられなかったのだ。

ワカゾノの対応が尋常でないほど冷たかったからだ。

ワカゾノはスーツの下のシャツの袖口をかじっている。

先にされたと同様にイサムはシルクハットを乱暴にワカゾノの頭にかぶせた。

「素っ気ないな」

邪気のない女の子の顔を思い出すとイサムは少し可哀想になった。不細工だけど愛嬌があった。

「別れたガールフレンドとか」

そんなイサムの言葉を聞いてワカゾノは穴が空くほどイサムの顔を見た。

イサムは無視した。

ワカゾノはやがてシャツの袖から口を離してこう言った。

「あれはただのサイフだ」

つまり俺は後釜か、とイサムは肩を落とした。
本当にワカゾノを実家に置いてこようかな、と考える。

イサムの期待に沿うことなく、ポスターはこの町でも見つけられない。
い。

「もうそろそろ」

最後の煙草にイサム火をつけたときワカゾノが言った。
イサムの胸は妙に高鳴った。
なにか見つけられるだろうか。
あのポスターにつながる何かを得られるだろうか。

「何も無いって、具体的にどういう状態なんだよ？」

イサムは興奮を隠せない。
ポスターの女が目浮かぶ。
今まで触れたどんな芸術作品よりもイサムの心を掴んで離さないあのポスターの真髓が近づいてきている。
浮かれるイサムの横ではワカゾノが眠そうな顔つきでだらしなく歩いている。

「倉庫だよ」

「倉庫？」

「倉庫しかない。しかももう使ってない。何十年も前に工場があったんだけど、その持ち物だよ」

イサムは少し解らなくなった。

あのポスターと倉庫になんの意味があるというのか。

「その倉庫って使ってないのか？」

「だからそう言ったじゃない」

「昔の工場って何の？ひよっとすると印刷系じゃないか？」

「知らねえ」

二人が目的の住所に着いたとき、細かい雨が降り出した。

4つの倉庫が立ち並ぶその空間は町から疎外されたようにひっそりとしていた。

フェンスもしていないし周りとの境界線は無いに等しいのに、疎まれているかのようにイサムの目に映った。

一面が砂利で埋め尽くされているが、石と石の間から小さな草たちが恥ずかしそうにはみ出している。

煉瓦づくりの倉庫は貫禄があって、ひとつひとつは小さいが迫力を放っていた。

表面にはスプレーで書かれた落書きが無数に浮かんでいる。

扉には巨大な錠がかけてあり、触った者に強烈な臭いと痛みを与え、るのに十分すぎるほど錆びている。

ずっしりとした重厚感はイサムを圧倒した。

あんぐり口を開けて倉庫の前に立ちすくむイサムにワカゾノが声をかけた。

「満足した？」

ワカゾノは不機嫌そうに手で肩の雨水をはらう。

「何言ってんだ、これからだよ」

イサムは倉庫ひとつひとつの扉を開けようとする。

ポスターにはこの住所が記されていたんだ。

何かあっていいはずだ。

錆び切った錠を思い切り握ったせいでイサムは手を痛めた。

「開かねえよ。全部鍵かかってんだよ嚴重に」

ワカゾノが声を荒げる。

シルクハットを目深く被って雨をしのぐ。

細かい雨粒は服の奥深くまで入ってきて、二人の身体を芯から冷やしていった。

ワカゾノは倉庫から遠く離れた場所から焦燥感に駆られているイサムの姿に無感動な視線を送る。

「見てねえで手伝え」

「嫌だ。帰りたい」

「たまには俺の我が儘も聞いてくれよ」

「いつあんたに我が儘きけって言ったよ？」

あからさまに馬鹿にするような笑いでワカゾノが返す。

イサムは最後の倉庫まで行き着き、扉が開かないことを確かめるとがつくりと肩を落としてワカゾノの場所までやってきた。

ワカゾノは腕組みをして暖をとりながらイサムを睨む。

イサムはこのところワカゾノとの仲が滅法悪いな、思い始める。

今までよりもずっと緊張感を伴っている。

ぴんと張りつめた空気が二人の間を泳ぐ。

「ばーか」

ワカゾノは拳でイサムの背中を叩いた。

叩かれたところをさすってイサムはもう一度4つの倉庫を眺める。

ワカゾノが立て続けに3回くしゃみをした。

ここの住所が書かれていたのに。

何かあっていいはずなのに。

「ワカゾノ、お前ちょっと来い」

イサムは、相変わらず寒そうに胸の前で組まれたままのワカゾノの腕を掴んで歩き出した。

ワカゾノは露骨に嫌がった。

買ったばかりのスーツは雨でびしょ濡れ、昔の女にははち合わせるし、そもそも連れて来てやったイサムは何の収穫もないと言う。

ワカゾノは震えながらイサムの手を振り払う。

「どこ行くんだよ、傘を買えよ」

「名案だ」

イサムはコンビニで小学生もはみ出してしまうような小さな傘を買った。

ワカゾノは文句をつけながら、それでもイサムの後をついて行った。

雨あしは強さを増し、車が水たまりを豪快に跳ねてゆく。

イサムは口をきかずに黙々と歩く。

ワカゾノにも見せてやろう、と思う。

自分が必死になっている理由を教えてやる。

嘲笑われてももう構わない。

ワカゾノにもあのポスターを見せるんだ。

雨水がイサムのスニーカーに入り込み、靴下も濡れて気持ち悪い。

でも歩き続けた。

バスは何台も通り過ぎたが、乗りたくなかった。

イサムは少しでもワカゾノに嫌な思いをさせてやりたかった。

イサムは歩きながら、さつき道で会った女の子のことを思い出した。
罪の無さそうな女の子。

ワカゾノにサイフと呼ばれる女の子。

イサムは可哀想に、と思う。

そしてまた自分も同じ立場にあることに気づく。

自分という貯金箱が割られる日はそう遠くないかもしれない、とも
思った。

「これ、見てくれ」

埃臭い文房具屋の前までやっとたどり着いた。

二人は歩き疲れたのと雨に濡れたのでボロボロだった。

雨をかぶった文房具屋は辛気くさを磨いているように見える。

でもポスターは健在だ。

相変わらず凄まじいインパクトを放出している。

晴れているが昼間だろうがこの文房具屋に貼られているが、美しく輝いている。

なんのことか解らないというようにワカゾノは肩をすくめる。

イサムがポスターの右下を指差すと、ワカゾノは大儀そうに腰を曲げて小さな文字を読んだ。

「あ、この住所」

このポスターを見て、それでどうしても行きたかったとイサムが話す
すとワカゾノはぼかんとしてイサムを見返した。

「タイプなのか、この女？」

「そういうんじゃない」

小さな傘に二人で入りながらポスターを眺める。

店の中から意地悪そうな顔の老婆がそんな二人を不審な目で気にかけている。

イサムは老婆の目を気にしながらも、自分がいかにこのポスターに感動して、運命的なものを感じるかをワカゾノに話して聞かせた。

ワカゾノは興味なさそうにふんと笑って、イサムのアパートに向かって歩き出した。

イサムは少し立ち止まり、でもワカゾノの後を追った。

「下らねえ」

またくしゃみをしてワカゾノが吐き捨てるように言う。

「わざわざ俺を呼ぶ意味が解んねえ」

前者の言葉も後者の言葉も正しいな、とイサムは考えた。
そこからは何も話さずにアパートまで歩いた。

ただならぬ緊張感はやはり二人にまわりついて離れない。

イサムは髪の毛を触って水気を飛ばす。

急にポスターに関する全てのことが本当に無意味なことになってきた。

ワカゾノの鼻をすする音を聞いて自責感に見舞われる。

部屋に入っても二人はしばらく口を聞かなかった。

イサムがワカゾノにタオルを投げる。

頭からタオルをかぶってワカゾノがイサムに言った。

「あのポスターの女」

「ん？」

「ミツに似てる」

イサムはワカゾノのその一言に凍り付いた。

イサムの髪の毛からポタリポタリと水滴が滴り落ち、カーペットに染みをつくる。

妙な動悸を感じる。

タオルを頭からかぶっているワカゾノの顔はイサムには見ることができない。

イサムはぐるぐると回るような頭の中で必死に考えた。

あのポスターの女はミツなのか。

そう言われれば似ている気もするし、全然違う女にも見える。

もしミツだったら、とイサムは考える。

もし仮にあのポスターの女がミツだとしたら自分は取り憑かれたようにミツに夢中になっていることになる。

これは、決して起こってはいけないことだ、とイサムは思う。

絶対に起こってはいけない。

タッチの顔が浮かぶ。

そしてポスターの女の顔が浮かび、続いてミツの顔が浮かぶ。青ざめるイサムにワカゾノがタオルを放り、こう言った。

「嘘だよ」

イサムはレコード屋のシャッターを開ける。

隣の雑貨屋からはお香の匂いがぷんぷん漂ってくる。

雨はすっかりあがった。

ワカゾノにからかわれたイサムはあの後すっかり気が抜けてしまった。

しかし、ミツのことであんなに動揺するなんてと自分を情けなく思った。

冷えきった店内に暖房をいれる。

一昨日買い取ったレコードの中身を確認、ジャケットを消毒する。いつものレコード屋。

いつもの始まり。

それでもやはりイサムの頭にはポスターが思い描かれていた。

ワカゾノに変なことを言われて腹立たしい気もしたが、それ以前にイサムを襲ったのはやはりミツへの脅威だった。

なにもあんなに驚くことなかったな、とイサムは気恥ずかしくなる。昨日ワカゾノはあれから意地悪く笑ってすぐにアパートを出て行った。

イサムが仕事に行く時間になっても帰って来なかった。

ようやく暖かくなってきたレコード屋でイサムはぼんやり座っていた。

ポスターのことを考える。

あの住所の意味は結局わからず終いだ。

ミツのことを思い、タッチのことを考える。

この商店街はゆったりと時間が過ぎてゆく。

忙しい人は一人もない。

怒る人も悲しむ人もあまりいない。

同じく幸せな人もそう多くはない。
平淡な商店街。

向いの古着屋の前では店員同士が静かに談笑している。

イサムは水たまりを器用によける女の子を見送って、一升瓶を持った歳とった男を見送った。

大きな溜息をつく。
変な感じだ。

イサムがiPodをスピーカーに繋いでいるそのときだった。
店のドアが開いた。

イサムが勢いよく振り返るとタッチが立っていた。

「よう、やってるかい？」

タッチはにこやかに笑って狭い店内に入ってきた。

イサムは喜んでタッチを歓迎した。

突然のことに、このところのタッチに対する罪悪感は顔を出さなかった。

イサムがBGMを選んでいたところだと言うと、タッチはイサムのiPodをくるくるといじって曲を探した。

タッチが来るのは珍しいことだった。

タッチは最近、総菜をパックに詰め込む夜勤のバイトをしてこの時間は眠りこけているのだ。

昼夜逆転は身体によくないと知りつつも時給のよさと単純作業がタッチには魅力的だった。

言葉の要らない職場。

外国人留学生なんかも多く働いていた。

タッチは毎晩毎晩、脂っこい臭いにまみれて働いた。

立ちっぱなしの仕事は足腰にこたえた。

身を削るように働いているが、タッチにはそれがバンドのためなのか何なのか解らない。
明確な目的などない。

でもそれはいくらまともな仕事に就こうとも変わらないことだ、とタッチは思っている。

その仕事のためにタッチは頭を丸刈りにした。

アピアランスチェックが厳しいのだ。

そこまでして仕事にバイアスをかける理由もタッチには解らない。

「夜勤で疲れんだろ？」

消毒を続けながらイサムがタッチに問うと、タッチは曖昧な返事をした。

まだiPodを触っている。

イサムが奥の物置からパイプ椅子を持ってきてタッチに勧めた。

クモの巣がついている。

イサムはレコードの埃をとるクリーナーでさっと拭いた。

「最近さ」

タッチが重い口調でそう言ったのはイサムが買い取った全てのレコードの消毒を終わらせたときだった。

あれだけiPodを触っていたのに店内には何の音楽も流れない。

タッチは曲を探そうとしていたのではない。

ただ落ち着かなかっただけだ、とイサムは感じ取る。

イサムは消毒液を棚に置いてレジの前の椅子に腰掛けた。

タッチが何か大変なことを言い出しそうだからだ。

イサムは身構える。

タッチはイサムの顔を見ようとしなない。

暖房の働く機械音だけが店内に響いている。

イサムは黙って横に座るタッチを見つめる。
たくましい肩が今日はやけに自身無気にみえる。

「最近、ミツとちっともううまくいかないんだ」

下を向いたままタッチが言い憎そうに呟いた。

イサムは微動だにすることができず横目でタッチを見る。

昨日、ワカゾノに「ミツに似ている」と言われたときと同じように固まってしまった。

イサムは「でも」と言いかけたが涸れた声は音になる前に消えた。

「ミツとうまくいかない。どうしてだろう」

タッチの注意深い言葉の選び方はずきずきとイサムの胸に刺さった。
どうしてだろう。

イサムは頭の中で訊いてみる。

このところ俺の周りでは妙なことばかり起こっている。

さて、なぜだろう。

こっちが訊きたいぐらいなんだ、とイサムはタッチに抗議の目を向ける。

タッチは俯いたまま何も言わない。

答えておくれ、イサムはポスターを想起する。

「でもさ、喧嘩なんてしょっちゅうしてるんだろ？」

イサムが調子外れな声でそう言うのとタッチがようやく顔を挙げた。
失望がタッチの目に浮かんでいる。

イサムは平静を保とうとする。

だって自分は何もやましいことなんてしてないんだから、物理的には。

タッチは目の色とは打って変わって明るい声で言った。

「そうだよな、いつものことだよな」

イサムはほっとした。

ミツのやつが余計なことを言っていないならば大丈夫だ。

イサムはタッチが大切だ。

ミツやワカゾノを失うことがあっても、タッチを失うのは想像しただけで気が狂いそうになる。

ここまで一緒にやってきた仲間を失うのは、イサム自身を位置づける物差しがなくなる気がして不安なのだ。

だからタッチの笑顔を見てイサムは心底安心した。

その後イサムとタッチはしばらくバンドの話なんかをしていた。

「急に押し掛けて悪かったよ」

タッチはそう言うともう一度イサムのiPodを操作して、店を出て行った。

イサムはタッチを見送ることができなかった。

店に流れたのがwonderwallだったからだ。

その日は奇しくもバンドの練習がない日だった。

ツヅキバシの母親が大きく体調を崩したせいだ。

その連絡を受けたのはタッチがレコード屋を出て行って程なくしてからだ。

イサムは繰り返し再生される wonder wall に耳を傾けて深く考えた。

ミツはあの晩のことを脚色して話したのだろうか。

それともありのままを話したのだろうか。

イサムはパイプ椅子に浅く座る。

タッチは何かおかしい。

たまたま wonder wall をかけるなんてこと起こりえるだろうか、いや、考えられない。

イサムは前髪を触る。

何も解決しない。

煙草に火をつける。

それでも何も解決しない。

タッチは「どうしてだろう」とイサムに問うた。

こっちが訊きたいんだ！

イサムは心の中で声をあげる。

タッチはあまりに言葉が少なかった。

もっと話してみないことには何も解らない。

しかしよりによってバンドの練習がないという。

釈然としないまま何日間かタッチに会えないのか。

イサムはタッチに連絡しようと携帯電話を握ったが、連絡したところで言うべきことは何もないことに気づいた。

携帯電話をそっとポケットにしまう。

その日、タッチ以外にレコード屋に入ってきた人はいなかった。

イサムは口笛を吹いてアパートに向かう。

しかし思い直して文房具屋まで歩いた。

ポスターを見る。

今日も変わらない。

変わっていくのは自分たちだけだ。

イサムは深呼吸する。

文房具屋の引き戸を開ける。

予想以上に重たいそれは開けるのに時間を要した。

店の中は蛍光灯のせいで全体的にうつすらと青く、外と変わらないくらい寒かった。

厚手のマフラーを鼻まで上げてイサムは店内をうろついた。

スケッチ用の鉛筆が箱に入っていたり、印刷用紙が重ねてあったり、九九が載った下敷きがあったりした。

埃とカビの臭い。

懐かしい。

イサムはレジの前で店員を呼んだ。

奥から面倒臭そうに老婆が出てきた。

地味な和服に割烹着を着ている。

電気の光は老婆を不健康に見せる。

イサムは自分も具合悪そうに見えているのを想像する。

「探し物？」

低い声で言う老婆にイサムはポスターの入手先を訊いた。

初めからこうするべきだったと思いながら。

老婆は黙って店の外に出て、ポスターを確かめに行った。

イサムも続いた。

老婆の歩くペースはひどくゆっくりでイサムは申し訳なくなった。

ポスターを見上げて、老婆はやはり面倒くさそうに言った。

「新聞社から来たのを適当に貼ってるからね。その中の一枚でしようが」

彼女は怒ったように店に入って行った。

イサムは小さな声で礼を言って家路につく。

そして自分の祖母を思い出す。

雲泥の差があるな、と思う。

久々に早い時間にアパートに帰ってきたイサムはさっさと部屋着に着替えてキッチンに立った。

タッチのことを考えると、何もできなくなってしまふ。

気を取り直して冷蔵庫を開けたり棚の中を調べたりを繰り返す。

心が優れることはなかった。

こんな日に限ってワカゾノはいない。

あいつがいれば何となく世話を焼いていられるから、余計なことを考えなくていいのにな。

イサムは初めてワカゾノの長所を見つけた。

ポスターのことを考える。

老婆は新聞社から来たと言っていたがそれが確かかはわからない。

イサムは目をつぶって上を向く。

一体、どうしたっていうんだ。

日常がちよっとずつ日常でなくなってきた。

イサムはしばらくそのままじっとしていた。

テレビをつけたり本を読んだりして気を紛らわそうとしたが、イサムの胸にはすつきりしないわだかまりが住み着いている。

こんな変な感覚をイサムは味わったことがなかった。

ポスターを目にしてからというものの自分を取り巻く世界が少しずつ狂ってきている、とイサムは信じて疑わなかった。

あのポスターは救ってくれるわけじゃない。

答えもくれないし、モノクロをカラーにしてもくれない。

カラーどころか暗黒だ。

あのポスターが良くないことをもたらしているんだ、とイサムは恐ろしくなる。

ポスターが元凶かもしれない。

イサムは膝を抱えて俯いた。

一人取り残されたような気持ちになる。

考え込んだまま動かないイサムは携帯電話の着信にびくんと身を震わせる。

タッチか、ワカゾノか、それともミツか。

イサムは及び腰になって電話を床から拾う。

ディスプレイを見たイサムは安心したような落胆したような、なんとも言えない表情を浮かべて電話に出る。

トミーからの電話だったのだ。

ベーシストのツヅキバシと一番仲のいいトミーは、一人時間を持て余しているようだった。

トミーはドラムを叩く以外に好きなことは何も無いと言って、イサム等のバンドに入ってきた。

大袈裟だと他のメンバーは笑ったが、言葉の通り三度の飯よりドラムが好きだった。

中学生のときドラムをはじめて、それ以来、飯と睡眠の時間以外は

全てドラムに愛情と熱意を注いできた。

授業中は足を鍛えてバスドラムの技術を磨き、40度の熱を出したときもスティックは決して離さず手首を強化した。

イサムのバンドの中で最も高い技術を誇るプレイヤーだ。

どんなハードは曲も平気でやってのけるため、不細工だが人気がある。

小学生かと思紛うドングリのようなヘアスタイルと冴えない眼鏡のせいで、もっと不細工に見える。

ところが性格はずば抜けてよかった。

イサムは一番仲がいいツツキバシを羨ましく思ったことが何度もある。

ワカゾノは多少陰気ではあるが性格のいいトミーに最初は目をつけていたが、実家暮らしであると知ってターゲットをイサムに変えた。イサムはそれを最近になってトミーに聞かされた。

トミーは「暇なら家に来ないか」とイサムを誘った。

イサムは二つ返事をしていそいそと支度して家を出た。

トミーの家は古い造りの木造で、隙間風がイサムの身体をじわじわと冷やしていった。

畳の上に灰皿だけが虚しく乗ったシンプルな部屋に入る。

トミーは不細工な顔でイサムを迎え入れる。

トミーのその部屋は一面ポスターだらけで実際の間取りよりも遥かに狭く見せていた。

ポスター。

イサムのポスターに対する感情は少しずつネガティブなものに変化していった。

あのポスターを見てからなんだ。

あれさえなければ自分はきつと今までと変わらぬ退屈だが荒波の立

たない生活を送っていられただろうに、とイサムは考える。

イサムはそこでふとトミーがかつて新聞社で働いていたことを思い出した。

そのせいでバンドの練習時間が今とはまったく違っていたのだ。

新聞屋たるもの、太陽が昇るか昇らないかという時刻にはもう頭をフル回転させていなければならぬ。

トミーの容姿からイサムは「苦学生」と呼んで馬鹿にしていた。

「トミー、新聞屋で働いてたよな？」

「働いてたよ。新聞ばかり触って指、真っ黒になるんだぜ」

トミーはにこにこしながら煎茶を出してくれた。

畳の匂いがイサムの鼻に心地よく、思わず寝転がる。

所々荒れた畳はイサムの靴下を汚した。

イサムはガチャガチャとCDを触るトミーの後ろ姿に、ポスターのありのままを話した。

不可解な住所のことも、それが新聞社から運ばれて来たらしいことや、そのポスターを目にしてから珍妙なことに見舞われていること、全てを話した。

イサムはしばしばトミーにこうして打ち明け話をしていた。

トミーはどんな相手でもリラックスさせることができる。

トミーの顔を見て、トミーの声を聞くと皆なんだか拍子抜けしてしまうのだ。

加えてトミーは聞き上手だった。

明確のアドバースや答えを出してくれるわけではないのだが、何かとカミングアウトされることの多い男だった。

だらしなく煙草を吸うイサムを少しびっくりした目で見て、トミーはまずCDをかけた。

イサムの知らない曲だったが、歌の入らない静かな音楽はトミーへ

の安心感を増した。

畳の上に正座して不細工な顔でイサムを見てトミーは答える。

「変わった話だ」

イサムは朝方までトミーの部屋で話したり寝たりして過ごし、とぼとぼと帰って行った。

とてつもなく大きなわだかまりはイサムの胸につかえたままだ。

ツヅキバシの母親の手術の関係で、ここ3日ほどバンドの練習はないとトミーに伝えられたイサムはタッチと話すことのできない苛立ちを隠せなかった。

イサムはシャワーを浴び、昼まで寝ようと思ったが脳は活発に働いている。

何曲か音楽を聴き、古い映画を途中から途中まで観る。

なにをやっても落ち着かない。

足を投げ出して座り込んだイサムはうなだれて考え込む。

なにかが確実に変わり始めている。

自分が変わっているのか、周りが変わっているおか、それとも何も変わっていないのか、イサムには見当もつかない。

これから一体どうなってしまうんだろう？

イサムは宙を仰ぐ。

ふとベッドの下がやたらと乱れていることに気がついた。

イサムが溜めるに溜めたレコードの山は行き場を失い、やがてベッドの下に落ち着いていた。

殊レコードに関しては几帳面なイサムはレコードを綺麗に積み重ね、その上から大判のストールをかけて収納していた。

ところが最近はずっかりレコードよりもCDをかけてばかりいたため気にかけることも少なくなっていた。

にも関わらずストールはくしゃくしゃになってベッドの脚の脇に転がっている。

レコードの山は崩れ、中身が出て来ているものもある。

なにより枚数が明らかに減っている。

イサムは不思議に思っ部屋を見回す。

トミーと話し込んでいる間に空き巣でも入ったのだろうか。

だとするならばそれはかなり物好きな空き巣だな、とイサムは思う。見たところ無くなっているのはレコードだけで、金になりそうなワカゾノの服や靴はそっくりそのまま残っている。

イサムはレコードを一枚ずつ確かめる。

あれだけ可愛がっていたレコードたちも、いざ何が無くなっているかを確認しようとしても咄嗟に思い出せない。

でも減っているのは確かな事実なのだ。

イサムは焦る気持ちを抑えてバラバラのレコードジャケットに埋もれて床に仰向けに倒れ込んだ。

何が自分に起こっているのか。

目を腕で隠して深く息を吸う。

イサムがそうしてからアパートの扉が開くまでの時間はそう長くなかった。

のろのろと腕を下ろすと、ワカゾノが立っていた。

しばらくぶりに見たワカゾノの顎にはうっすら髭が生えている。

どんな生活をしていたのか、イサムは少しだけ興味があった。

ワカゾノは床に寝ているイサムに首を傾げ、それからだらしなく会釈した。

「久しぶりに見る気がするよ」

イサムはむっくりと起き上がってレコードを重ね始める。

イサムの声が聞こえなかったのか、ワカゾノは洗面所から「なんだった?」と大きな声を出した。

隣の部屋まで筒抜けになるような大きな声だった。

イサムはぶつぶつと何かを言ったが、それはワカゾノにもイサム自身にも解らなかった。

シャワーを浴びて部屋に戻ってきたワカゾノは眠そうな顔でダイニングテーブルについた。

テーブルに乗っているイサムの煙草に手を伸ばし、でもすぐに引込めた。

ワカゾノの短い前髪の下の目はイサムにはいつもより無感動なものに思えた。

「お前レコード知らない？」

イサムは髪をばさばさと触りながらワカゾノに尋ねる。

家でもレコードの整理、仕事に行ってもレコードの整理。

イサムは溜息をつく。

「売ったけど」

ワカゾノの静かな声はイサムの動きをぴたりと止めた。

イサムは振り返ってダイニングテーブルに優雅に座るワカゾノをまじまじと見つめる。

濁った目つきでイサムを見下ろすワカゾノは平気な顔でカーディガンの袖をかじっている。

イサムはゆっくり立ち上がってダイニングテーブルに向かう。

嘘だと言ってくれ。

答えを覚えておくれ。

イサムはもう一度言えとワカゾノの詰め寄った。

「売った」

悪びれる様子をこれっぽっちも見せないワカゾノにイサムは何の感情も抱かなかった。

何も思わなかった。

イサムは荒々しいことは好きじゃない。

でもワカゾノにはもうお手上げだ。

イサムはワカゾノが腰掛けていた椅子を蹴飛ばしてワカゾノを立たせる。

拳をねじ込んでやろうとした。

ところがイサムは思い直してやめた。

イサムがどれだけ剣幕を放ってところでワカゾノは小馬鹿にしたように笑うだけだったからだ。

そして身体中から絞り出すように一言だけ言った。

「ワカゾノ、マジで出て行ってくれ」

イサムはその夜のことをあまり覚えていない。

ワカゾノがアパートを出て行ったことはかろうじて覚えている。

でもその他になにがあったのか、まるで思い出せないでいた。

思い出せないのではない、イサムは考える。

思い出したくないから忘れることにしただけ。

イサムはなにも考えなかった。

ワカゾノもなにも考えていないように見えた。

ワカゾノには心なんてないんじゃないか。

感情を持たない人形みたい。

イサムはレコード屋のレジの前で頬杖をつき音楽を聴いていた。

商店街は相も変わらず時間が止まったように呑気だった。

夕食の時間が近いから肉屋は大変に繁盛している。

イサムはポスターを見てからの自分の生活を頭に巡らせる。

現実を素直に見る目を失った。

タッチとの仲も消え入りそうだし、ミツへの警戒心が消えた。

バンドさえどこかに行ってしまいそうだ。

全部、ポスターを見てからだ。

イサムはそう信じて疑わない。

全てあのポスターのお陰で狂っている。

イサムはポスターの女の顔を思い浮かべる。

濁った目でこちらを睨む女。

イサムはあれほどミステリアスな魅力を感じていた女に、いつしか

嫌悪を抱いていることに気づいた。

もう何も求めない。

現実逃避の道具にもしない。

何も教えてくれなくてもいい。

答えなどいらない。

ただ、今までの毎日を返してくれ。

イサムは両腕で頭を抱え込む。

返してくれ、俺の現実を。

誰も来ないレコード屋で一人、イサムはうなだれる。

夜の10時半をまわったころ、イサムの電話が鳴った。

イサムは実に複雑な気持ちになった。
ディスプレイを見るのが怖い。

今までの日常を取り返したいのに、いざそんな局面に達するとどう
していいか解らない。

いい考えが浮かばない。

自分の力ではどうにもならない気がする。

イサムはタッチからの電話だったときの対応を考えた。

タッチとはとにかく話すことが必要だ。

後味が悪すぎる。

ワカゾノだったらどうだ。

放っておこうか、それともこれまで通り自分が妥協してずるずると
居候させるのか。

日常なんか抹消してしまいたい衝動に駆られるときもある。

でも自分にはそんな度胸ないはずだ。

イサムはパイプ椅子の上に膝を抱えて座る。

電話はいつの間にか止んだ。

イサムはiPodから流れてくる音楽に合わせて2曲ほど歌を歌っ
てから携帯電話を見た。

電話をかけてきたのはミツだった。

その事実はいさむを悩ませた。

なんだって電話なんてかけてよこすのか。

ただでさえタッチは自分とミツの關係に疑問を持っているのに。

イサムは半ば憤怒を抱えて携帯電話をレジカウンターに放り投げた。

これ以上混乱させないでくれ。

夢の中にいるみたい。

落ち着かない日々。

誰か、現実を返してくれないか。

膝を抱えたままイサムはぼんやりと考える。

ミツのワンピースの裾が柔らかく揺れていた夜を思い出す。

タッチと過ごした怠惰だが、期待すべきことがあった日々を思い出す。

イサムは時計が11時をさしたころミツに電話をした。電話することに躊躇していたイサムにとってミツが電話に応えるまでのコール音は、かつてないほど居心地が悪かった。

「デートしない？」

ミツの少しかすれた声はイサムの涸れ切った心に染み込んだ。

ミツは元気そうな声を出してはいたが、その声にはいつもの活気が感じられなかった。

作ったような陽気な声がイサムの胸に突き刺さる。

もしミツの誘いに乗ったら、彼女はまた仮面をかぶるだろうか。それとも仮面のない素のミツに惹かれる自分に出会うだろうか。

イサムがあれこれと考えている間、ミツは適当な話をしているようだった。

寒いから毛布を出したとか、今日の学校は退屈だったとかいう話が断片的にイサムの耳に入ってきていた。

集中していないイサムに、ミツは突然静かな声で告げた。

「好きになってくれなんて言っていないじゃない」

イサムはうまい返答を考えられずに黙りこくってしまった。

いつものミツになら何て返していたか。

イサムは真っ白の頭で思考する。

大体、ミツに電話するなんてこと自体しなかったはずだ。

イサムは髪の毛を触って、「いいよ」と言った。
なにも思わない。

タッチのガールフレンドとデートをする。

なんとも思わない。

ワカゾノになった気分だ。

イサムは閉店作業を進める。

好きになってくれなんて、言っていないじゃない。

こう言ったミツの顔にはお面なんてへばりついてなかった。

イサムはそう思い、ふんと溜息をついた。

閉店したレコード屋の前でイサムはなかなかやって来ないミツを待った。

タツチのことは頭の片隅に追いやられていた。

冷たい風が吹いて、イサムのジャケットがめくれあがる。

ストライプの裏地が気に入って買ったものだった。

風に乗ってワカゾノの香水の匂いが鼻をつく。

イサムはいじけたような気分になって煙草に火を点けた。

何もかも、一からやり直したい。

虚無感に見舞われる。

商店街を行き来する者は少ない。

イサムは肩をぎゅっとすくめて寒さに耐えた。

このところ、イサムはwonder wallばかり聴いている。

聴きたくないはずなのに聴いてしまう。

ちよっと口ずさんで、すぐに恥ずかしくなってやめた。

野良猫が走り去るのを横目で追う。

鼻から大きく息を吸う。

冷たい空気が気持ちいい。

「やだ、待たせちゃった？」

ミツがあはは、と笑いながらやって来たとき、イサムの手は寒さでがたがたと震えていた。

膝上ほど丈のある大きなパーカーを着たミツの背中にはアコースティックギターが貼り付いている。

「なに、そのギター」

イサムは靴の底で煙草の火を消して道路に捨てる。
ミツはイサムが顔を挙げるまで何も答えなかった。
イサムの目を物珍しそうにじっくり観察しながらミツは答えた。

「もらったの」

「ふむ」

イサムが歩き始めるとミツも小走りについてくる。
人通りの少ない道をひた歩く。
星のない空を見る。

イサムは何も思わない。

突然、ミツがイサムの背中をばんと叩いた。

「なんだよ」

「どこ行こうとしてるの」

イサムはミツの肩から丸裸のアコースティックギターをとって自分の肩に担ぐ。

ボディーに小さな傷がたくさんついている。

かなり年季の入った代物だが、安そうなギターだった。

イサムはこのギターの音を想像する。

チューニングがぴったりと合っていても、どこかズレたような音を出すに違いない。

ミツにされたようにイサムはミツの背中を思い切りたたく。

「ジュークボックスだろ？」

にやりと笑ってミツは背中をさする。

電信柱にいちいち手を添えながら歩くミツのペースに合わせてイサムは歩調を弱めた。

「歌おうよ！」

ミツは鼻をすすって手拍子しながら大声でイギー・ポップを歌い始めた。

イサムは星のない空をまた見上げる。

やがて一緒にイギー・ポップを歌い出す。

煙草に火を点けるために立ち止まる。

ミツはイサムなどいないかのように歌い続ける。

イサムはふと思う。

ミツと一緒に馬鹿なことをやって楽しんでいる自分に驚きを隠せない。

かつての自分はどこに行ったのか。

大きなパーカーから出るミツの細い脚を眺める。

楽しいならいいじゃないか。

イサムは少し走ってミツに追いつく。

風が吹いて煙草の煙がミツの顔にかかる。

「ごめん」

ミツはううん、と言ってイサムの指から煙草を取りゆったりと吸った。

二人はそのまま大して言葉を交わすことなく、つい最近廃校になった小学校まで歩いた。

「グラウンド。ここで歌おう！ギター弾いてよ」

イサムは頷いて煙草を捨てようとした。

さっきミツが吸ったせいで濃いリップの色が付着している。
ふん、と笑って思い切り捨てた。

「なにがおかしいの」

ミツが両手をポケットに突っ込んで仁王立ちしている。

上着の裾からホットパンツが見え隠れしている。

華奢なミツの身体を見ると、イサムは何故だか淋しいようなやるせないような、変な気持ちになって首を振りながら答えた。

「あんた。と、俺」

グラウンドの真ん中まで走って行くミツの後ろ姿をぼんやりと見て、イサムは肩からギターを降ろした。

イサムは地面にあぐらをかき、チューニングを始めた。長年バンドをやっているせいでEの音はすっかり耳に馴染んでいた。思ったより透き通る音が出る。

「これどうしたの？」

単純なコード進行で適当に弾きながらイサムはミツに尋ねる。

「もらったんだってば」

ミツはイサムの真横に脚をくずして座った。

「うん、誰に？」

「誰だっていいじゃない」

鼻をすすって下を向きながらミツは投げやりに言った。

イサムはおかしなことを質問してしまったように思えて、少し気まぐずになった。

風が吹くとグラウンドの砂が舞った。

イサムは参って目をぱちぱちさせたが、ミツはあまり反応しなかった。

ミツは真剣な顔でスニーカーの紐を結び直している。

財布からピックを取り出してイサムはiggypopのnofunを弾く。

ミツは楽しそうに手を叩きながら大声で歌った。
かつてsex pistolsがカバーしたように滅茶苦茶に歌った。

かすれたミツの声はパンクによく合った。

アコースティックのパンク。

イサムとミツはげらげら笑いながら歌った。

真っ暗な校舎を見る。

イサムは小学生のころの自分を思い出す。

小学校は嫌いだったのに、何故かほんのりと暖かみのある思い出が蘇ってこなかった。

歌い終わるとミツがイサムの前髪をサラサラと撫でた。

ジャケットのポケットから煙草を取り出して火を点けるイサムをミツがじっと見つめる。

「なに？」

「その前髪好きなの。それだけ」

イサムは吸いかけの煙草をミツにやった。

空には相変わらず厚い雲がかかっていて星はおろか月もない。

ミツはパーカーの袖を伸ばして脚をこする。

ギターのチューニングを用心深く直してイサムはどんどん曲を弾く。

始めはミツも知っていそうなメジャーな曲を選んでいたが、自分が好きな曲もたくさん弾いた。

時折、風が吹いて口に砂が入ってくる。

ミツと一緒にグラウンドに唾を吐く。

ミツが楽しそうに潤れた声で笑う。

イサムはタッチのこともワカゾノのことも、ポスターのこともすっかり忘れていた。

それほどミツと一緒にいることのインパクトが大きかったからだ。
イサムはデュエットできる曲を探して弾いた。

p e t e b j o r n & a m p ; j o h n の y o u n g f o
l k s を弾くとミツは大いに喜んだ。

たまに通行人がグラウンドを覗きにきたが、すぐに帰って行った。
あれだけ寒かったのに、歌っているうちに汗が出てくる。

左手が痛くなるまで弾いて、水ぶくれができて限界になったとき、
イサムは乱暴にギターを放り投げた。

「もう駄目だ。指いてえ」

水ぶくれを触りながらイサムが音をあげると、ミツはあからさまに
落胆した顔を見せたがすぐに切り出した。

「飲み物買いに行かない？」

「名案だ」

最寄りのコンビニに着くまでも二人で歌った。

ミツは途中、イサムの左手をとって水ぶくれを力いっぱい押してか
らかった。

あれだけ曇っていた空はいつの間にか晴れ、無数の星がきらきらと
光っていた。

「天然プラネタリウム」

ミツも空を見上げている。

パーカーの背中には素人文字で『FUCK』と書かれていた。

「ひょっとして自分で書いた？」

イサムはミツの背中を軽く押して訊いた。

ミツは少し間を置いて言いにくそうに口を開く。

「うーん、これ、タッチのなの」

イサムはそっか、と言って煙草をくわえる。

急に罪悪感にかられ、気を紛らわしかった。

コンビニで買った酒とジャンクフードを抱えて二人はまたグラウンドに戻った。

ビールが嫌いなミツは甘いアルコールの缶を開けて、イギリス訛りで「チアーズ」と言った。

イサムとミツは他愛もない話をする。

月明かりがグラウンドを照らす。

「前だったら」

トルテイヤにかじりついて、ミツが話し始める。

イサムは黙りこくってミツに耳を傾ける。

「前だったらあたしのこと、ちっとも構ってくれなかったのにね」

空き缶を握りつぶして、イサムは考え込む。

ミツが鼻をすする。

前髪を触り、イサムはのろのろと口を開いた。

「それは、俺が変わったって意味？」

首を傾げてミツが答える。

「あたしは変わってない」

「俺だって変わってない」

トルテイーヤの3分の1ほどを食べて、ミツは残りをイサムに渡した。

「タッチは？タッチは変わったと思う？」

細い脚を投げ出してミツが訊いた。

イサムも真似をして脚を投げ出してみる。

「さあ」

トルテイーヤを平らげてイサムは言う。

「解らないけど。変わらないものなんて何もないんだよ」

イサムの目を見てミツは何故だか安心したような表情を見せた。うんうんと何度も頷いてゴミをビニール袋に押し込む。

イサムはミツの小さな肩に腕を回す。

それから空が明るくなるまでイサムはミツと話していた。

イサムの頭にははつきりとタッチの存在があったにも関わらず、罪責感はなかった。

ミツは携帯電話の時計を見て、だるそうに学校があることをイサムに告げた。

イサムが帰ろうか、と立ち上がるとミツはポケットから黒いアイライナーを引っ張り出した。

背伸びしてイサムの下まぶたにアイラインを一気に引く。

あっけにとられたイサムは為す術もなく立ち尽くした。

生まれてから化粧などしたことのないイサムは、初めてのアイラインの感触を不思議に味わっていた。

もっと硬いものだと思っていた。

ミツは気が済んだというように、イサムの目を満足げに見上げる。

「うん。ピート・ドハーティーみたい」

イサムは自分の顔を見てみたくもあつたが、どうせ長い前髪で隠れてしまうだろうと思って何も言わなかった。

イサムは結局、ミツを大学まで送った。

二人とも寝不足と酒のせいで千鳥足だった。

イサムはこんな状態で大学に行っているのかと訊くと、

「これぐらいが丁度いい」

とミツは笑った。

大きなビルが立ち並ぶ大学構内で、部外者のイサムは肩身の狭い思いでもじもじしていた。

ミツはそんなイサムを笑った。

別れ際、ギターをミツに返してイサムは手を振った。

「退屈になったら歌えばいい」

ミツは硬い表情でふんと笑う。

それからイサムの前髪を触って、小さな声で言った。

「イサムのガールフレンドって幸せなんだろうな」

イサムが何も言えずにいると、ミツは1度も振り向かずビルの中に走って行った。

イサムは目をぎゅっと閉じて深呼吸した。

バンドが自然消滅の形で解散してしまったのは、イサムがミツとデートをして間もなくのことだった。

多くの時間と経験を共にしてきた関係がこんなにも簡単に壊れてしまふことをイサムは恐ろしく思った。

なんて、もろくて不安定なんだろう。

最後のスタジオ練習の日、イサムはタッチに呼び止められ、スタジオに残った。

理由を尋ねるだけ無駄だが、タッチはこのところかつてないほど不機嫌だった。

イサムはでも悪びれる様子もなくタッチと向き合うことにした。

タッチはそわそわと落ち着きなく動き回っていたが、言葉を発することができずにいた。

「タッチ、お前がムカついてんのは俺か？それともミツ？」

タッチは眉をひそめてイサムの顔を一瞥し、うつむいて答えた。

「多分、どっちでもないんだ。すごく頼りない答えだけど。どっちでもない」

イサムは黙ってシールドを片付ける。

タッチは相変わらず緊張しながら突っ立っている。
前髪を触る。

イサムはこれだけの仕草にも敏感に反応し、そっと手を引っ込めた。

「この前髪好きなの」

ミツの声が耳の奥で聞こえるような気がする。

何が変わってしまったんだろう。

あたしは変わってない。

ミツが言う。

俺だって変わってない。

イサムは心の中でミツに返す。

タッチが変わってしまったのだろうか？

いずれにしても、変わらないものなんてこの世に何も無い。

ポスター。

イサムはこちらをじっと睨む女の顔をぼんやり頭に思い浮かべる。

やっぱり、あのポスターを見てからだ。

何もかも、すっかり変わりつつある。

ここしばらく見ていないワカゾノの、洋服の袖を噛む顔を思い出す。
ミツと朝まで遊んだ日を思いめぐらして、目の前のタッチを眺める。
どうにでもなればいい。

イサムはどうでもよかった。

こんな現実、いらない。

こっちから願い下げだ。

スタジオの外でイサムはタッチに煙草を1本やった。

タッチは一度断り、そのあとすぐに受け取った。

青白い街灯の下でイサムとタッチは長い間押し黙っていた。

イサムはこれまでにないほど集中して煙草を吸った。

美味くも不味くもなかった。

タッチは煙草を踏みつぶしてモッズコートのポケットに両手を突っ込んだ。

弱々しいイサムの口笛が夜中の道に虚しく響く。

「よくわかんないけど。変わらないものなんて、何もないんだろ
う、イサム？」

イサムは今度こそ真っ直ぐにタッチの目を見た。

どうしてそんなこと言うんだ。

ひんやりした空気の中でイサムは苛つきを隠せない溜息を吐く。

終わりなんだな、とイサムは思う。

もう何もかも終わりなんだ。

現実の怖いところは逃げ場なんて用意されてないってことだ。

目を泳がせたまま棒立ちになっていたイサムの腕をぽんと叩いてタ

ッチは暗い道を歩いて行った。

イサムは何も言わなかった。

言えなかった。

モッズコートの後ろ姿を見る。

手の平で額を押さえる。

こうすると、なんとなく気が静まるように思えたからだ。

でもそれは単なるイサムの思い込みだった。

街灯の下から動くことができない。

タッチを失い、ワカゾノを失って、バンドを失った。

現実を捨てようと思ったら、大事なものを失ってしまった。

そうか、とイサムは思う。

これが現実を捨てるという意味だったのか。

マフラーを鼻までぐるぐるに巻いて家路につく。

ちよつとでも気を緩めると嗚咽してしまいそうだ。

イサムはマフラーの下で大きく息を吐く。
こんな心細い思いをするのは、生まれて初めてのことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4090g/>

ポスター

2010年11月2日21時54分発行